

～2017年 夏号～

OBON SOCIETY

家族が繋がり..... 心が癒される



獲得した日章旗を掲げる米国海兵隊員マーヴィン・ストロンボさん：1944年南太平洋にて

マーヴィン・ストロンボさんの物語

第1話

冬の休暇の頃は、私達が手を止めて、とても忙しかったOBONソサエティの一年間を振り返り、またそのメッセージが世界中を駆け巡った、驚くべき物語を思い起こすのに良い時期です。

今年の2月にOBONソサエティは、どちらかと言えばごく普通のemailを受け取りました。私達は実際ほぼ毎日このようなemailを受理しているので、特別に思うことはありませんでした。

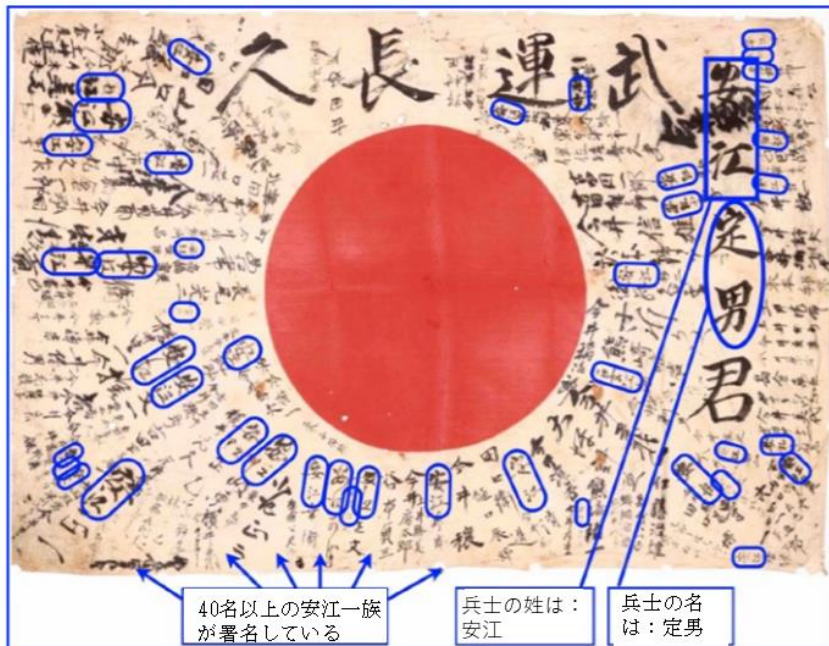
題名：日章旗の返還

内容：

こんにちは。私の名前はサンドラ・ウィリアムソンです。私の父マーヴィン・ストロンボが日章旗をお返ししたがっているのですが、彼は日章旗を郵送したくはないというのです。私たちの友人で今週オレゴンに旅行する人がいます。彼が直接そちらのどなたかに旗を手渡すことは出来ませんか？可能性があればお知らせください。

私達はいつものemailと全く同様に、サンドラさんへ、お父様の旗を受け取り搜索活動をさせて頂くことを光栄に思いますと返事をしました。

彼女たち家族の友人であるジョセフ・タコブスキーさんは、会議への道中で立ち寄り、旗を届けてくれました。最初に見た時、私達は沢山の署名の姓が、この旗の持ち主と合致していることに気付きました。それまでの経験から、私達はこの旗を携えていた若者が、叔父や叔母、いとこ、姪や甥達に囲まれて暮らしていたことが分かりました。



けれどもより重要なのは、この旗が、生存している第2次世界大戦の退役軍人から送られてきた、ということでした。OBONソサエティは退役軍人の方からの依頼はいつも“最優先”“至急の追跡”にしており、この旗の搜索へも直ちにに取り掛かりました。

沢山の同一姓はOBONソサエティ 搜索班にとって豊富な手掛かりとなりました。数週間うちに彼らはこの兵士が住んでいた日本のある地方を決定づけました。更により深い搜索によって、ある特定の地域、そしてその地元の一軒の農家を突き留めました。

私達のご遺族を見つけ出しました。さあ、連絡を取らなくてはなりません。



安江辰也氏

このような誰も全く予期せぬ知らせをご遺族へお伝えするには、細心の注意を払います。OBONソサエティの調査によってご遺族が判明すると、飛騨護国神社の宮司さんが安江辰也氏に初めて話をしました。安江さんはお兄さんの日章旗についての驚くべき知らせに熱心に耳を傾け、そして尋ねました…

「兄の旗を持っているという人は、戦争から旗を持ち帰った人と同じ人なんですか？」

宮司さんは応えました。「はい」
その後は長い沈黙がありました。恐らく2分ほどして、弟さんは別の質問をしました。



安江定男命

「その人は、兄さんがどこで、どのようにして亡くなったか知っているのでしょうか？」

宮司さんはこの会話を私達へ伝えてくれました。私達は、未帰還兵となったお兄様についての彼の質問や会話の内容から、安江さんの記憶は実に鮮明であると判りました。

これは大変に特別な状況です。地球上で、このご遺族の質問に答えられる人物はたった一人しか存在しません。そしてその人は、モンタナ州で暮らしているのです。

私達は、ストロンボ氏の健康状態が良好で、もしも彼が日本へ行きたいと願われたとしたら、彼こそがこのご遺族と会って未帰還兵のお兄様についての質問に答えることができる人だ、と確信しました。それを確かめるためには… 答えはひとつ。まずはストロンボ氏に直接お会いして、彼の健康状態を見極めなければ。私達は車に荷物を積み込み、出発しました。



アストリアからコロンビア川に沿って走り、ワシントン州を抜けてアイダホ州に入り、遂にピタールート山脈を越えてモンタナ州に入りました。長いドライブでしたが、やがて私達はミズーラに着き、マーヴィンさんが娘のサンドラさんと彼女の夫と共に住む、こじんまりとしたこ綺麗なお宅を見つけました。



マーヴィンさんは、私達が期待した通りにお元気できばきとし、魅力的で礼儀正しく鮮明な記憶を保持されている紳士でした。御年92歳でありながら、今なお薪木割の斧を振るっておいででした。マーヴィンさんが10代の頃にさかのぼる彼の人生の興味深い話を語るのに耳を傾けながら、私達は長い時間をし、共に夕食を頂きました。



マーヴィンさんは、どの町や便利なものからも遠く人里離れた、モンタナ州の農場で生まれ育ちました。彼と4人の兄弟妹達は、家族が生き延びるために朝から暗くなるまで働きました。子供たちにとっては限らない労働に明け暮れるだけの報われない生活でしたが、この暮らしのおかげで男の子たちは屈強でたくましい、勇敢な若者に成長しました。



マーヴィンさんが高校を卒業した1943年は戦争が進行しており、兄たちはすでに軍に入隊していました。彼が海兵隊に入りたいと言い出すと母は反対しました。一家はすでに軍へ十分に貢献しているし、さらに息子を差し出すのは危険過ぎます。それに、マーヴィンさんが農場に残り父の仕事を手伝ってくれば家族は助かるのです。



マーヴィンさんは1943年の春に高校を卒業しましたが、その年に初めて電灯を見たときのことを今でも思い出すそうです。

灯油ランプとろうそくの灯りで育ったマーヴィンさんは、電灯の灯りに驚くばかりでした。彼は壁のスイッチの隣りに椅子を運び、夜の間中、何度も何度もスイッチを上げ下げしました。指先でカチッカチッと触れるだけで部屋中が光に満ち溢れ、そしてまた漆黒の闇に落ちることにただ驚き入っていました。

その夏はずっと農場に残って働き回り、8月になると母の反対を押し切って海兵隊に入隊しました。彼は新兵訓練所をいとも簡単に通過し、太平洋戦域の最前線に送られたのでした。



マーヴィンさんの戦争体験は広範囲に渡りました。彼は太平洋戦線中、最も激しく過酷な戦闘をいくつも戦いました。小さな手帳には旅程が、それぞれの戦闘が行われた島々の名前と到着、出発の日付と共にきちんと書き込まれていました。



日本軍が降伏すると、マーヴィンさんは米軍の占領部隊が到着するまでの間、町を監督するために長崎へ送られました。その後アメリカへ戻りモンタナの生家へ帰りました。

ストロンボ家の2人の兄達はヨーロッパ最前線で、マーヴィンさんとオリバー兄さんは太平洋戦域の最前線で戦いました。皮下に榴散弾を撃ち込まれ、生々しい傷跡、難聴、夜な夜なうなされる悪夢を抱えながらですが、4人全員が激しい戦争を生き抜いたのです。

私達はただ、かわいそうなお母さんが、戦争の渦中の4人の息子たちを心配してどれほどの眠れぬ夜を過ごしたか、想像することしか出来ません。彼らは2人ずつ地球上の正反対の地へ送られました。たまに来る手紙は恐らく、さらなる心配の種になっただけでしょう。しかし4人の兄弟が無事に農場に戻り、テーブルについてお母さんの愛情のこもった手作りの料理をむさぼるように食べるのを見た日の、お母さんの言葉では言い表せないほどの喜びは、容易に想像することが出来ます。





私達は、マーヴィンさんは素晴らしく健康的で日本への旅行に十分に耐え得るお身体だと判断しました。けれども日本行きについてご興味があるか尋ねると、少し考えさせて欲しいと言われました。何日か過ぎてマーヴィンさんは一つの質問をしてられました。

「日本へは飛行機で何時間掛かるの？」

約10時間ほどと分かると即、行くことに決めました。

後になって、彼はこう説明してくれました。

「毎年オレゴン州のポートランドに住んでいる娘を訪ねるのに13時間、車に乗って行くんだ。車にそれだけ長い間座っていられるんだから、飛行機に10時間座っているのは訳ないことだとすぐに分かったんだよ。」

マーヴィンさんは日本行きを願っています。私達は次に、日本のご遺族と話さねばなりません。このような個人的なご遺品の返還は、かなり感情的な場になることも多くあり、その場への出席はごく近親者に限られることも多いのです。神社の宮司さんや、しばしば行政の場で返還式が執り行われることもあります。OBONソサエティはいつでもご遺族のご意向に沿い従います。

今度は安江さんと話し、マーヴィンさんとお会いしたいですか？と尋ねると、躊躇なく返事が帰ってきました。

「はい！」

旅は始まった！

さあ、OBONソサエティはこのアイディアを実際の計画に仕立てなければなりません。これは容易なことではありませんでした。まず第一にマーヴィンさんは93歳、安江さんは89歳で人里離れた山あいに住んでいます。このかけ離れた距離を越えて二人の出会いを実現させるためには、何百という細かな打ち合わせをしなければいけません。

最初、私達は、できるだけ小人数で行こうと計画しました。4人でしたらホテル2部屋、列車は向かい合わせの席、そしてタクシー1台で済みます。食事の時も4人で一つのテーブルに座れるし、日本の狭いエレベーターも1台に収まります。けれども、マーヴィンさんの2人の娘達と孫娘も一緒に行くことになり、この計画は変更となりました。

次に、旅行の時期は日本の夏の暑さと旅行客のピークを避けて5月又は6月にしようと考えました。けれども安江さんは、5月は田植えや畑の苗の植え付けで多忙を極め、6月は茶畑の収穫で忙しく時間が取れない、と言いました。御年89歳の現役の農夫は、最適な時期を見極めて植え付けや収穫をしなければならないのです。



その後、安江さんは、お兄さんの旗を8月15日に受け取りたいと明言されました。このことにより旅の日取りは決定しました。あとは詳細を決めるだけです。

OBONソサエティはどんなことも成り行き任せには出来ません。マーヴィンさんの体調と安全は何よりも優先されなければいけない。これには実に注意深い計画と熟考を要しました。

アメリカと日本、両OBONソサエティのスタッフは、旅程、電車の時刻、ホテルやレストランのあらゆる可能性を綿密に調査しました。それぞれの旅程によって乗り継ぐ駅から次の駅までの歩行距離や階段の数なども調べ協議しました。8月中旬は夏の旅行シーズンのピークなので、どの電車の切符やホテル、レストラン、バスまでもすべて予約しておかねばなりません。5か月に及ぶ計画と準備期間を経て私達の旅程は確定し、すっかり準備が整いました。

この話を私達から聞いた人たちは皆、心温まるこのような話をメディアで紹介したら、と勧めてくれました。けれどもAARPマガジンから主流の全国ニュースまで、私達がコンタクトを依頼したどのメディア支局も興味を示しませんでしたし、そのほとんどが、返事さえもくれませんでした。

そうこうするうちに、共同通信社（他のメディア支局へ話題を提供する日本のニュース編集局）がロサンゼルスから記者を送って寄こし、その後ぎりぎりのタイミングでポートランドのAP通信がこの話題をニュースにしました。この報道は地元ポートランドの放送局の注意を引き、彼らはなんと日本へ出発するわずか2日前にマーヴィンさんにインタビューしたのでした。



たいていの人はテレビカメラを目の前にすると緊張したり怯えたりしますが、マーヴィンさんはまるで十分にリハーサルしたプロのように自然体でリラックスされていて、決してたじろぐことがありませんでした。報道関係者は皆、彼と彼の物語が大好きになりました。

とうとう8月10日がやって来ました。日本への出発日です。

私達はポートランド空港に集合しました。マーヴィンさんと二人の娘達ブレンダさんとサンドラさん、そして孫娘のエミリーさんと家族の友人であるジョセフさんが旅人たちです。OBONソサエティメンバー二人と、この旅を記録するためにOBONソサエティが採用した若い映画製作者も日本へ行動を共にします。他のOBONソサエティのスタッフは日本で加わってくれます。

AP通信の最初の報道には良い反響があり、彼らは空港の中でマーヴィンさんを取材したいと依頼してきました。またAP通信アジア支局は、日本でこの話題を取り上げると知らせてきました。

(左下の写真は、AP通信の記者がカメラを調整中に、ブレンダさんがお父さんに取り付けるマイクrohンを隠しているところです)



デルタ航空はポートランド⇄東京の便利な直行便を運航しています。デルタ航空のスタッフはチケットカウンターでマーヴィンさんに会々と、出発まで待つラウンジへと彼を案内してくれました(右上の写真)



ポートランドを本拠地とするデルタ航空社員のうちの数人がテレビでマーヴィンさんの報道を見ていて、彼が搭乗するときに気付いてくれました。機長までもが運航中にやってきてこの特別なお客に挨拶してくれました。マーヴィンさんは素晴らしい席でとても良いもてなしを受けました。彼がせねばならなかったことは、ただ座ってくつろぐことだけでしたー

太平洋を越える空の旅は穏やかで快適なものでした。マーヴィンさんは眠れずにずっと起きていました。これから大冒険が始まるのです..... 到着地は日本の東京です！



近日公開：
マーヴィンさんの日本滞在記 第2話

～この人道的活動にご賛同いただけましたら、皆様のご支援をよろしくお願いいたします～

〈ご寄付の郵送先〉
米国在住の場合、小切手での
ご寄付の宛て先です。

OBON SOCIETY
P.O.Box 282
Astoria, Oregon 97103

〈オンラインでは〉
クレジットカードまたはペイパルのアカウントから米ドル、日本円どちらでもご寄付をして頂けます。

<https://obonsociety.org/jpn/page/support>

OBONソサエティは皆さまからのご寄付をもとに活動しております。

今までのご支援に深く感謝しつつ、さらなる活動のために
皆様の温かいご支援、ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

日章旗を所有されていたり、旗を所有されている方をご存知でしたらOBONソサエティにご連絡ください。
私達は日本のご親族に旗を返還させていただきます。
ご質問等があればご遠慮なくご質問くださいませ。

OBON SOCIETY
P.O. Box 282
Astoria, Oregon 97103
contact@obonsociety.org